

(1993年11月26日設立)

英語語法文法学会 THE SOCIETY OF ENGLISH GRAMMAR AND USAGE

事務局便り

No. 26

2011年4月12日

会長 安井 泉 事務局 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部英文文学科
吉良文孝研究室内 tel. 03-5317-9709 / fax 03-5317-9336 email: kira@chs.nihon-u.ac.jp
郵便振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会
ホームページ: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/segu/>

このたびの東北地方太平洋沖地震により、被害を受けられた皆さまに、謹んでお見舞い申し上げます。

皆さまの一日も早い復旧復興を心よりお祈り申し上げます。

<巻頭言 1>

心を伝える

会長 安井 泉

平成23年3月11日午後2時46分、私は自宅にいた。住んでいるマンションは2階であるにもかかわらず、激しい揺れが続いた。建物が倒れてつぶれるまでは揺らし続けるぞという地震の悪意すら感じられ、こうやって自分の人生は終わることになっていたのだと思った。揺れが収まるとテレビをつけた。テレビで報道されるマグニチュードは何度も訂正されてゆく。と思ったとたん、津波の映像である。東北ののどかな田園地帯を巨大なアメーバーのような津波が食べていく。これは映画ではなく、人が死んでいく現実なのだと思うと、悲鳴にならない声が漏れ、心の底に重いものがたまっていく。津波の被害は青森から千葉まで及び、東北から関東の平野を海に変えた。テレビからはコマーシャルが消えた。そして、福島原子力発電所の事故。だれも経験したことのない現状は、学者の能力を遙かに超え、一般の人々の不安の方がずっと現実に近いはずなのに、解説者の説明にいらだつ。日本政府は原発「廃炉」を前提としたアメリカ合衆国からの冷却剤の提供を断った(ワシントン11日ロイター通信、郡山市長の記者会見(19日))。政府は言語道断にも日本人の命よりも経済を選択したのである。14日頃より民放にコマーシャルが戻るが、当たり障りのないように、どれも公共広告機構(AC)のものである。

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと

「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

このコマーシャルは、大正末期に彗星のようにあらわれ儚く散った、童謡詩人・金子みすゞの「こだまでしょうか」という作品。人のコミュニケーションの本質をとらえている詩と感じる。

被災地で杖を頼りに7キロの山道を歩いて、たった一本の電話をかけたおじいさんの笑顔が映った。記者から話しかけられると、話を聞いてくれたことに何度も「ありがとう」「ありがとう」を繰り返して、電話が家族に通ずるとうれしそうに、また「ありがとう」「ありがとう」と満面にこぼれる笑みを振りまきながら杖を頼りに7キロの道を帰って行った。自分にはそういうことができるだろうか。被災した人はみんな立派な人だ。立派な人が選ばれて被災をしているようにも見える。井上ひさしが『父と暮らせば』の中で原爆に生き残った人の罪悪感をていねいに描いたように、助かった日本人は「私だけが助かってしまった」と、この罪悪感さえ抱いているのだ。

被災したある小学校の卒業式が映っていた。
「復興は半年や一年ではできないと思います。10

年あるいはそれ以上の年月が必要となるかもしれません。そのとき中心となるのは君たちなのです」と先生が祝辞を述べる。関東地方と東北地方で実施中の計画停電は4月末をめぐるといって東京電力の会見があったが、夏になれば電力需要が今の1.6倍を超える現実の前に計画停電は4月いっぱい終わるはずがない。交通は寸断され首都圏でも陸の孤島が出現し闇夜に乗じて事件も起こっている。

日常が戻ることはあるのだろうか。戦争カメラマンが地震直後の南三陸町に入り、この惨状は戦場の比ではないと断言した。津波にのみ込まれた街は戦後の焼け野原の写真とそっくりである。

この原稿を書いている今日は、地震からまだ一週間しかたっていない。とても一週間とは思えないほどの長い長い時間が流れている。原子力発電所の事故以来、東海村の臨界事故とは比べものにならないほどの危機感と恐怖に包まれている。テレビからは安心して安全そして何よりもクリーンなエネルギーとCO₂削減の切り札と原子力発電推進の旗を振ってきた御用学者が消え、あれだけいた政治家はだれ一人出てこない。科学的ということは何だったのだろう。

二十世紀の前半、構造主義言語学の立場に立つ書物の最初のページの第一文は判で押したように決まっていた。Linguistics is the scientific study of language. (言語学とはことばを科学的に研究する学問である) 当時学問は科学であると宣言しなければ仲間に入れてもらえなかった。言語学はこの踏み絵を踏んだ。そのことによって、もしかしたら学問が100年遅れてしまったのかもしれないと最近思うようになった。科学というのは intersubjectivity という「皆の主観が同じであること」「皆が正しいと思っていること」をよりどころとして成り立っている。見方を変えれば、科学というのは全員が間違っている科学に正しいということになるものなのだ。今回の東北関東大震災、福島原子力発電所の事故に、たかが人間の考えることという、私たちの小ささや無力さを思い知った。日本列島はいま54基の原子力発電所に取囲まれている。福島第一原子力発電所では7号機、8号機の建設が計画されており、2016-17年頃から稼働の予定とウェブサイトにはあった(現在閲覧不可)。そんな中で、笑顔の被災者が私たちの心に残してくれたものは、金子みすゞの詩に歌われている人と人との心のつながり方であった。人にとってなくてはならないものは人である。私たちが本当に伝えたいと思っていることは「理」ではなく「情」なのだ。人に優しくすれば、人は優しくしてくれるが、人がいくら地球に優しくしたところで、地球が人に優しくしてくれることはない。

(2011年3月19日)

<巻頭言 2>

研究者はどうあるべきか

会長 安井 泉

震災から一ヶ月。閉塞感に包まれている。天災からの復興の足を引っ張るのは、日ごとに深刻さがますます福島原子力発電所事故の後手後手に回る政府が引き起こした人災だ。計画停電という国民に向けられた刃は、原子力発電事業を継続するための世論操作のようにさえ見える。この暗澹たる日常の中で、白川静という一人の学者の生きざまが、その学風と共に頭から離れない。文字学としての「字書」を完成させた白川静は『字通』『字統』(音引きの字書)『字訓』(訓引きの字書)『常用字解』(平凡社)の字源学、そして身近には『孔子伝』(中公文庫)で知られる。この学者の真価を正しく理解していた人は少なかった。

白川静の「右」と「左」の字源を承知している人もいるかもしれない。「ナ」は手を表している。「右」は神への申し文すなわち「祝辞(のりと)」を入れる器「サイ」を右手に持って、神に祈ることで、そこから「右」の意味に、「左」の「エ」の部分は神様にまじないをかける道具で、この「エ」を左手で持って、神様にまじないをかける姿で、「左」の意味(小山鉄郎『白川静読本』78頁、平凡社)、と説明する。神と人との交流という神事のファンタジーとしてすべての漢字を体系的に読み解いた壮大な漢字論である。日本語の漢字は音声主旋律型のアルファベット系の言語圏で生まれたのではない。漢字を漢字文明圏の書字主旋律型の言語圏特有の文字として見つめ、ことばと文字との関係構造を「東洋」ということばにつき止めることに成功したのである。

「白川は、文部省の漢字政策を徹底的に批判して、「誤りを正当として生きなければならぬという時代を、わたしは恥ずべきことだと思う」(『字統』序文)とまでいっている」(立花隆『白川静読本』245頁)。1992年のインタビューの中で「学会での冷遇の話をかかると、言下に、学問は政治ではないので、そんなことは気にもならない、とおっしゃった」(呉智英『白川静読本』122頁)。白川静は狂気を知る本物の学者だった。狂気を知る学者の数は最近目に見えて少なくなっている。

「いるのは、ただの研究者、追従者、輸入業者、学閥政治家、曲学阿世の道化、そして税金泥棒だけである。学問は死んでいる。偽学者たちが殺したのだ。学問すなわち知ること命を賭けるといふ精神のありよう、すなわち狂気は、生活至上の大衆化の時代において忘れ去られてしまったのだ」(池田晶子『白川静読本』124-5頁)。

わたしは団塊の世代である。1960年代後半は大学生で学生運動に明け暮れていた。「産学協同路線反対」のスローガンがあちこちで上がっていた。企

業からお金をもらえば企業に魂を売ることになり、企業にとって都合のよい研究成果を発表せざるを得ない。それは何者にも犯されてはならない学問の自治の破滅を意味する、というのが反対の趣旨であった。今の研究は、産学どころか産官民一体である。正しい判断を下せるわけがない構造になっている。

連日の報道で流される情報をわたしたちはとにかくに信ずることができなくなっている。ごく普通の人々が、この学問のからくりを見抜いている。東京電力は大手テレビ局や一部の国立大学の大スポンサーとなっている。テレビに映る学者や報道の歯切れの悪さは、この背景に原因があると思わざるを得ない。

わたしたちの生活は便利になり、さらにすさまじい速度で進んでいる。ものごとの処理から歩く速度にいたるまで、駆け足で処理されていく。周りを見れば 24 時間営業のコンビニ、夜も明るい繁華街はもとより、自動改札、自動扉、自動販売機、自動券売機と「自動」の陰で電気は際限なく消費され、人々の雇用が電気に略奪されている。かつてはわざわざ人を訪ね顔を見ながら話をしていたのに、いつの間にかそれを電話ですませるようになり、電話がメールに取って代わった。人が人と会う機会を世の中のスピードが奪っている。人と人が結ばれる糸は限りなく細くなっている。だからであろうか、人はその細い糸を何本もほしがらるようになる。一日中人に会わなければ、ことばを交わすこともない。今日は家族以外の他人とどれだけことばを交わしたとふとふりかえってみると、ことばを交わすことのない時間が積み重ねられていることに呆然とする。

この 4 月『100,000 年後の安全』という映画が封切られた。人間は人間に危害を与えるものを作ってはならないはずであるのに、人類は天然自然には存在しない核燃料廃棄物という毒物を作り出してしまった。映画はフィンランドのオルキルオトに建設中である「原発から出る高レベル放射性廃棄物（世界に 25 万トンある）の最終処分場「オンカロ」（隠された場所）」のドキュメンタリーである。数字の桁を間違えてはいけない。「10 万年後の安全」である。予告編では「ある日人類は新しい火を発見した。その火は強力すぎて消すことができなかった」とある。世界中の原子力発電所の使用済み核燃料は世界中で刻一刻とたまっていく。ためて隔離しておくよりほかに打つ手立てはない。増え続ける核廃棄物は科学が進歩するはずの 100 年後の人類ならなんなく処理することができるのではないかという根拠のない漠然とした願望がそうさせている。さらに原子力発電は 1 kw あたり 7 円とコストが安く（このコスト計算には事故の補償も廃炉の費用もさらに最終処分の費用も含まれていないのであろう。そしておそらく立地調査費も建設費も）、さらに CO₂ を出さないクリーンエネルギーへのエネルギー革命として推進されてき

た。この政府主導の「革命」は癒着の温床を着々と作り上げ、権力にすりよって身を売り、政府に協力し安全を高唱する学者を優遇し、危険性を真摯に述べる学者を抹殺してきた。政府に加担し続けてきた学者の責任は重い。

民主主義における情報操作は、チョムスキーのことばを借りれば、共産主義における情報操作にくらべてきわめて巧みでわかりにくいぶん危険である、ということになるはずであるが、今回にみる情報操作はあからさまである。当初、福島原子力発電所の映像は、陽にさんさんと照らされる平和の象徴のような「資料映像」でしかなかった。それに気がつかなかった人々は、原発は大丈夫だったのだと思って安心したに相違ない。その後の悲惨な現場を目の当たりにし、発表される数値は「先ほどの」ではなく「昨日の」であり、今現在の数値は常にベールに包まれている。発表可能な数値のみが発表され、ほんとうはどうなのかがわからない。原子力発電所から 20 キロ圏内の立ち入り禁止区域では、犬や牛が徒党を組み群れて生活しているとの報告をラジオで聞いた(4 月 5 日 TBS ラジオ「Dig」)。放射性物質の飛散の仕方はドイツの気象庁の web サイトではじめて知った。デマに惑わされないようにとの政府から発せられる注意は「政府が発するデマに惑わされないように」としか理解できなくなるほどの疑心暗鬼に世の中は高度に汚染されている。

ここ一ヶ月で、少なくとも東日本に住んでいる国民は、「ヨウ素 131」「セシウム 137」「半減期」「マイクロシーベルト」「ベクレル」「原子炉格納容器」（高さ 32 メートル、外側に厚さ 2 メートルのコンクリート）「原子炉圧力容器」（厚さ 16 センチ、440 トン）「テトラポッド（一個 8~25 トン）が 1 万個沈められている堤防」「制御棒 97 本からなる燃料集合体 400 本」（数値は、映画『福島原子力』(企画 東京電力、製作 日映科学映画製作所)より。

(1966 年 12 月から建設が開始された東京電力の原子力発電所の原子力発電の仕組み、建設工程を詳細に記録した 27 分からなる劇場上映用映画。この時代に映画館で盛んに上映されていたもの。現在は科学映像館の Web サイトで視聴可能)、と原子力発電のかなりの専門家になってしまっている。さらに、原子力の専門家よりまさっているのは、今後の見通しについて専門家の想像力を遙かにしている点である。想像力の欠如した科学者を正すことができるのは文系の学者の想像力しかないという時代になるのかもしれない。

しばしば耳にする「想定外」ということばは、人の知見を持ってすれば何事も想定できるという人間の傲慢さを裏返した言い方である。狂気をもって研究にいそしむ学者の口から漏れ聞くことばとはどうてい思えない。最近の窮余の策と表される浅知恵には失笑も浮かばなくなった。

そんななか、あの 1970 年に大阪万博に太陽の塔を造った岡本太郎を主人公にしたドラマが放映さ

れた (TARO の塔 (4) 「芸術は爆発だ」平成 23 年 4 月 2 日 NHK 総合)。そのドラマのなかで、岡本は大阪万博を「人々の祭り」にするために自分をなげうつ。予算を獲得するための会議で岡本は発言する。「わたしはこの万博を全世界の人類が誇りを感じるような祭りとしてたい。そのためには驚きが必要だ。「べらぼう」というように私は表現しておりますが、世にも不思議な驚きがなければならぬ。それは特定された主義や主張であってはならない。そして、誰もが無償で神聖な気持ちになるものでなければならない。しかも展示物において、わたしは世界中の原始芸術を集めたいと考えております。そのために、わたしは世界を回ってこう呼びかけるつもりです。あなたの国で全くお金にならない生きる喜びを提供してほしいと。そう言われて、今の日本はいったいなにが提供できるのか。わたしは日本人として、そこで世界と戦いたいのです。しかしそれを実現するには、まったくもって矛盾しますが、お金がかかるのです。」

「全くお金にならない生きる喜び」とはなんであろうか。人間にとっても大きなそして本質的な喜びは「できるようなる」ことである。できるようになると、「人は強い幸福感と感動に包まれる。... ものを学ぶのはなぜかというのなら、その幸福感を知るためである。」(書評『視覚はよみがえる』(スーザン・バリー著 筑摩選書)養老孟司、「今週の本棚」毎日新聞 平成 23 年 4 月 3 日)と言えるであろう。少なくともこの本質的な喜びはわたしたちが手を伸ばせばすぐに届くところにある。どんなになじられてもよいが、この喜びを金で売ることにはできない。ことばを手がかりに人間を発見する道はどこまでも続いている。学会は、学問談義をする場所であり時間である。この学談のためであれば、この学会はなにをもちとわぬ。

(2011 年 4 月 11 日)



◆訃報のお知らせ

本学会名誉顧問の村田勇三郎先生 (立教大学名誉教授) が昨年 11 月 26 日、逝去されました。村田先生は、英語語法文法学会の第 2 代会長を 1996 年から 2000 年まで 4 年に渡って務められ、わが国の英語語法・文法研究に多大な貢献をされたことは言うまでもなく、本学会の設立・運営にもご尽力されました。ここに村田先生の生前の学恩に深謝し、謹んでお知らせいたします。

◆第 19 回大会開催案内

第 19 回大会は、下記の要領で奈良市で行われます。

日時：2011 年 10 月 15 日 (土)

会場：奈良女子大学

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

順路：(1) 「近鉄奈良駅」より徒歩 5 分。

(2) 「JR 奈良駅」から徒歩 15 分、あるいは路線バスで「近鉄奈良駅」下車徒歩 5 分。

●京都駅からは、

近鉄京都線で近鉄奈良駅まで特急約 35 分、急行 45 分。あるいは JR 奈良線で JR 奈良駅まで快速 50 分、普通 1 時間 10 分。

●大阪駅からは、

JR 大阪環状線 (外回り) で鶴橋へ、近鉄奈良線 (快急・急行) で近鉄奈良駅まで約 50 分。あるいは JR 大阪環状線 (内回り)、JR 大和路線経由大和路快速 (直通) で JR 奈良駅まで 50 分。

[http:// www.nara-wu.ac.jp](http://www.nara-wu.ac.jp)

今回のシンポジウムは、「日英語の比較一語法あるいは引用をめぐって」(仮題)をテーマとして準備中です。司会と講師は以下のとおりです。ご期待ください。

司会・講師 内田聖二 (奈良女子大学)

講師 廣瀬幸生 (筑波大学)

講師 山口治彦 (神戸市外国語大学)

◆第 7 回英語語法文法セミナー

標記セミナーが 8 月 8 日 (月) に大阪梅田の関西学院大学大阪梅田キャンパスで開催されます。詳細は決まり次第、学会の HP および雑誌などに掲載する予定です。今年のテーマは「授業に生かせる動詞の話」です。奮ってご参加ください。(必要な方にはセミナー受講証も発行いたします。)

◆第 11 回「英語語法文法学会賞」選考結果

初代会長故小西友七先生の寄付金を基金とした「第 11 回英語語法文法学会賞」(2009 年 4 月 1 日 ~

2010年3月31日までに出版された単行本が対象)について、今回は「該当者なし」という結果になったことが第18回大会において安井会長より報告されました。

◆第12回「英語語法文法学会賞」について

英語の語法・文法に関する優れた単行本を出版した学会会員に贈られる第12回学会賞対象図書¹の推薦を依頼いたします。対象図書は2010年4月1日～2011年3月31日までに出版された単行本です。自薦、他薦を問いませんので、同封の推薦用紙に記入の上、faxあるいは郵便で2011年5月10日までに事務局(吉良文孝)宛にお送りいただくか、推薦の内容をemailで事務局までお知らせください(email: kira@chs.nihon-u.ac.jp / fax 03-5317-9336)。

なお、毎年のお願いとなりますが、学会会員による出版物のすべてを事務局が把握することは困難です。当該年度に単行本を出版された会員の方は、書名、出版社名等を事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

英語語法文法学会賞の授賞に関する規定

(授賞)

第2条学会賞は、前年度4月1日から翌年3月末日までに、英語の語法・文法に関する優れた単行本を出版した学会会員に対して、学会が設置する「英語語法文法学会賞委員会」(以下「委員会」という)の選考により、運営委員会の議を経て授賞する。

2 授賞は、原則として年度ごとに1件とする。

3 授賞式は年次大会において行う。

4 受賞者に対しては、賞とともに賞金10万円を贈呈する。(関係部分一部抜粋)

◆第1回「英語語法文法学会奨励賞」選考結果

新設された「英語語法文法学会奨励賞」の栄えある第1回目の受賞者には下記の会員とその論文が選ばれました。第18回大会(日本大学)で表彰式が行われ、会長より賞状と賞品が贈られました。

吉川裕介氏「動詞pourはなぜ場所格交替できないのか」(『英語語法文法研究』第17号に掲載)

なお、第2回「英語語法文法学会奨励賞」は、本年7月10日締め切りの『英語語法文法研究』への応募論文がその対象となります。

◆第19回大会研究発表者募集

会員の方は下記の発表応募規定にしたがい、事務局(吉良文孝)宛に奮ってご応募下さい。

<研究発表応募規定>

1. 発表者は英語語法文法学会の会員でなければならない。
2. 発表時間は25分以内(別に質疑応答が10分)とする。
3. 発表要旨は、A4判32字×25行で4枚以内(原稿用紙使用の場合はA4判400字詰め横書き8枚以内)にまとめて3部を提出する(コピーで可)。ただし、参考文献表は枚数に含めない。論文冒頭には題名のみを記し、名前・所属は別紙に。
4. 論文題目、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、fax番号、email addressを明記した別紙を1枚添付する。
5. 同時に、前項の4と同じ内容と発表要旨のfile(MS WordあるいはPDF)をemailで事務局宛に送ること。emailの件名は「研究発表応募」とし、発表要旨のfileは添付fileとする。emailの宛先: kira@chs.nihon-u.ac.jp
6. 応募締め切りは7月25日(月)必着とする。
7. 郵送する発表要旨は、封筒の表に「研究発表応募」と朱書した上で、英語語法文法学会事務局(〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部英文学科吉良文孝)宛に送付する。
8. 選考及び研究発表の割り振りは大会準備委員会が行い、結果は8月中旬までに通知する。
9. 採用者は発表要旨(500字以内)を8月21日(日)までに、予稿集の原稿を9月24日(土)までに提出すること。これらの書式と締め切りは採用通知送付の際に改めて通知する。

◆第19回大会語法ワークショップ発表者募集

第19回大会の「語法ワークショップ」の発表者を募ります。語や構文などを取り上げ、言語資料に基づきその語・構文の統語上、意味上、あるいは語用論上の特性を明らかにすることを目的とします。語法ノートの的なもので結構ですから、会員の方は次の応募規定にしたがい、事務局(吉良文孝)宛に奮ってご応募ください。

<語法ワークショップ応募規定>

1. 発表者は英語語法文法学会の会員でなければならない。
2. 大会当日の午前10時30分ごろから12時までが割り当てられ、発表時間は一人12分以内(別に質疑応答が5分)とする。
3. 発表要旨は、A4判32字×25行で4枚以内(原稿用紙使用の場合はA4判400字詰め横書き8

枚以内)にまとめて3部を提出する(コピーで可)。ただし、参考文献表は枚数に含まない。論文冒頭には題名のみを記し、名前・所属は別紙に。

4. 論文題目、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、fax番号、email addressを明記した別紙を1枚添付する。
5. 同時に、前項の4と同じ内容と発表要旨のfile (MS WordあるいはPDF)をemailで事務局宛に送ること。emailの件名は「語法ワークショップ応募」とし、発表要旨のfileは添付fileとする。emailの宛先:kira@chs.nihon-u.ac.jp
6. 応募締め切りは7月25日(月)必着とする。
7. 郵送する発表要旨は、封筒の表に「語法ワークショップ応募」と朱書した上で、英語語法文法学会事務局(〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部英文学科 吉良文孝)宛に送付する。
8. 選考及び発表の割り振りは大会準備委員会が行い、結果は8月中旬までに通知する。
9. 採用者は発表要旨(500字以内)を8月21日(日)までに、予稿集の原稿を9月24日(土)までに提出すること。これらの書式と締め切りは採用通知送付の際に改めて通知する。

【応募上の注意】

研究発表とワークショップの両方に同時に応募することはできません。

◆『英語語法文法研究』投稿募集

『英語語法文法研究』(第18号)への投稿を受け付けています。論文・語法ノートへの投稿は現代英語の語法および文法に資する内容のもので未発表論文に限ります。原稿ができた時点で早目に投稿していただければと思います。

なお、最近インターネット上の用例を使用されている投稿論文が多いようです。インターネット上の用例を使用する場合は、インフォーマントチェックを必ず受けておいてくださるようお願いいたします。

<『英語語法文法研究第18号』の論文・語法ノートへの投稿規定>

1. 投稿は会員に限る。
2. 投稿論文は現代英語の語法および文法研究に資する内容のものであり、未発表の論文であること。
3. 投稿締め切りは**7月10日(日)(必着)**、採否決

定を8月中旬、刊行を12月とする。

4. 論文の場合、長さは33文字×30行、16枚以内とする。語法ノートの場合、長さは33文字×30行、6枚以内のものとする。
5. 論文・語法ノートはパソコンで、A4用紙にプリントアウトしたものを4部(コピー可)提出すること。また、氏名と略歴(連絡先の住所、電話番号、fax番号、email addressを含む)は、論文とは別紙で付けること。
6. 前項5と同じもののfile (MS WordあるいはPDF)をemailに添付して、大室剛志編集委員長(omuro@lit.nagoya-u.ac.jp)宛に送ること。なお、件名を「投稿」とすること。
7. 入力に関しては、既刊号の論文を参考にし、特に以下の点に留意すること。
 - a. 例文の前後に1行ずつ空白行を設ける。
 - b. 各節には見出しをつけ、節の前に1行ずつ空白行を設ける。
 - c. 外字、機種特有の文字・記号は使用しない。
 - d. 和文中の英語の語句の前後に半角のスペースを入れる。
 - e. 2桁以上の数字は半角を用いる。
 - f. 小説・論文の出典は下のように表記する。
(S. Sheldon, *The Windmill*), (Declerck 1979: 123)
8. 注は脚注とする。
9. 参考文献の書式は以下の例にならうこと。
Chomsky, N. 1986a. *Barriers*. Cambridge, Mass: MIT Press.
Chomsky, N. 1986b. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger.
Hopper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed., *Syntax and Semantics* 12, 213-241. New York: Academic Press.
柏野健次. 1993. 「easy タイプの形容詞の3つの意味」 衣笠忠司・赤野一郎・内田聖二(編)『英語基礎語彙の文法』145-154. 東京: 英宝社.
川本一郎. 1975. 「前置詞について」『英語青年』第120巻第5号, 23-26.
Lasnik, H. and M. Saito. 1984. "On the Nature of Proper Government." *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
島村礼子. 1990. 『英語の語形成とその生産性』東京: リーベル出版.
10. 氏名と略歴(連絡先の住所、電話番号、fax番号、email addressを含む)は、論文とは別

紙で付けること。

11. 原稿の採否は編集委員会の審査により決定する。
12. 著者校正は1回とし、変更は字句の修正のみとする。
13. 原稿料は支払わない。
14. 送付先：〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学文学部・文学研究科英語学研究室 大室剛志（「投稿論文在中」と朱記のこと）まで。

【応募上の注意】

学会誌への二重投稿、研究発表への二重
応募はお控えください。

◆英語語法文法学会第18回大会

英語語法文法学会第18回大会は2010年10月16日（土）、日本大学（文理学部キャンパス）にて開催されました。活発な議論、討論が行なわれ盛会でした。開催校委員をはじめ、お手伝いいただいた日本大学の教員・院生の方々にお礼を申し上げます。

ワークショップ 10.45 - 11.40

（3号館 3508 講義室）

司会 中澤和夫（青山学院大学）

1. 「具体的金額を表す名詞の副詞的性質について」 年岡智見（龍谷大学非常勤）
2. 「補文を取る I don't think 型の2つの用法について」 明日誠一（青山学院大学非常勤）
3. 「両面性表現」 金子輝美（愛知淑徳大学非常勤）

研究発表 13.00 - 14.45

第1室（3号館 3505 講義室）

司会 吉田幸治（近畿大学）

1. 「to と for の指向性—to NP、for NP と事態表現の観点から」 岩田真紀（京都大学大学院）
2. 「受動態をとるイディオムに見られる前置詞の特質について」 渡邊丈文（青山学院大学大学院）
3. 「二重目的語構文と動詞 pour の親和性をめぐって」 宮下亜矢子（京都精華大学）

第2室（3号館 3507 講義室）

司会 田中一彦（大阪市立大学）

1. 「被動作主項を顕現させない動詞に関する考察—レシピの英語を題材に—」 新池邦子（京都府立大学大学院）
2. 「英語の名詞における文脈依存の非状態的意味」 清水康樹（東北大学大学院）

3. 「属格代名詞を含む have 構文について」

武内梓朗（筑波大学大学院）

シンポジウム 15.35 - 17.45（3号館 3505 講義室）

テーマ「英語の冠詞、限定詞をめぐって—言語事実を如何に説明するか？ 語法文法研究、言語事実、文法理論、英語教育の interface」

司会 菅山謙正（京都府立大学）

1. 「英語の冠詞・限定詞：序論」 菅山謙正（京都府立大学）
2. 「英語教育の中の冠詞」 石田秀雄（京都女子大学短期大学部）
3. 「認知文法における「冠詞」と kind of N に出現する不定冠詞」 高木宏幸（近畿大学）
4. 「HPSG から見た限定詞」 前川貴史（北星学園大学短期大学部）

ディスカッサント 渡邊 勉（拓殖大学）
五十嵐海理（龍谷大学）

懇親会 18.00-19.30 会場：「コスモス」（3号館 1階）

◆新入会員紹介

石井雄隆

岩田真紀（京都大学大学院）

菅野悟（北海道教育大学）

熊谷哲孝（富士大学）

神戸崇寛（成城大学大学院）

小関隼平（北海道大学大学院）

清水康樹（東北大学大学院）

新池邦子（京都府立大学大学院）

武内梓朗（筑波大学大学院）

田中真実（関西学院大学大学院）

中島大気（日本大学大学院）

日本大学第二中学校・高等学校英語科

日本大学豊山女子高等学校英語科

松崎祐介（日本大学豊山女子高等学校）

宮下亜矢子（京都精華大学）

森創摩（筑波大学大学院）

森口稔（広島国際大学）

安原正貴（筑波大学大学院）

[50音順。敬称略]

◆年会費納入のお願い

2011年度（2011年4月～2012年3月）会費4,000円を同封の振替用紙でお支払いください。申し訳ありませんが、振替手数料は各自ご負担ください（郵便振替料金は120円（ATMからは80円）です）。金額欄が8,000円になっている方は、昨年度分年会費が未納ですので、併せて納入くださいますようお願いいた

します。会費が2年連続して未納の場合は、会員資格が失効します。

住所・所属に変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添え下さい。また、大会案内や機関誌等の送付には（経費節約のため）民間のメール便を利用しておりますが、この場合、転居先までの追跡送付ができません。発行物送付の遅延にもつながりますので、年度途中で住所変更された場合には、すみやかに新住所を事務局（会計・会員名簿管理担当：nakahito@fmu.ac.jp）までお知らせいただけますようお願い申し上げます。

◆新刊書紹介

事務局にお知らせいただいた会員の刊行物を逐次紹介いたしますので、事務局宛お知らせください。

- （出版月順、出版時期が同じ場合は著者の50音順）
- 吉波弘・中澤和夫他編 2010年5月『英語研究の次世代に向けて 秋元実治教授定年退職記念論文集』東京：ひつじ書房
- 東森勲（監訳）（五十嵐海理 他訳）2010年6月『認知と社会の語用論—統合的アプローチを求めて』東京：ひつじ書房
- 安井泉 2010年6月『ことばから文化へ』東京：開拓社
- 柏野健次（編）2010年7月『英語語法レファレンス』東京：三省堂
- 柏野健次 2011年3月『英語語法ライブラリ ペーパーバックが教えてくれた』東京：開拓社
- 衣笠忠司 2010年10月『Google検索による英語語法学習・研究法』東京：開拓社
- 児玉徳美 2010年10月『いまあえて ことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』東京：開拓社
- Bert Cappelle and Naoaki Wada (eds.) 2010年10月 *Distinctions in English Grammar Offered to Renaat Declerck*. Tokyo: Kaitakusha
- 澤田治美・高見健一（編）2010年12月『ことばの意味と使用—日英語のダイナミズム』東京：鳳書房
- 澤田治美（編）2010年12月『語・文と文法カテゴリーの意味』（ひつじ意味論講座 第1巻）東京：ひつじ書房

編集後記

「事務局便り」をそろそろ準備しようかと考えていたその矢先です。千年に一度ともいわれる未曾有の大震災が東北・北関東の広域を襲いました。学会員の皆様におかれましてはご無事でしたでしょうか。なかにはご本人が直接、あるいはご家族や親類といった間接的なかたちで被害にあわれた方もいらっしゃるかと思います。被災されたすべての方に心よりお見舞い申し上げます。その被害は、筆舌に尽くしがたく甚大なもので、原発の放射能事故の心配も加わり、ダブルパンチです。その一方で、救援物資、燃料なども届くようになり、少しずつではありますが復興への兆しが見えてくるようになりました。この「事務局便り」が学会員の皆様に届くころには、復興に向けて事態が今よりもずっと、ずっと改善されていることを祈るばかりです。

さて、お知らせしましたが、本学会名誉顧問の村田勇三郎先生（立教大学名誉教授）が、昨年11月26日、天国へと旅立たれました。村田先生は、本学会の設立メンバーのお一人で、その後の学会運営にも永くご尽力されました。現在、事務局は関東地区に移りましたが、設立当初の本学会の本拠地は関西にありました。それは初代会長の小西友七先生、そしてその門下の先生方が関西地区に多数いらっしゃったことも関係しているかと思います。学会も軌道に乗り、関東を拠点にご活躍の村田先生が会長になられたことによって、わが英語語法文法学会の全国展開が本格的に始まったといえると思います。会長就任に際しては、二つ返事とはいかず、説得の末に会長就任をお引き受けになったと漏れ聞いております。村田先生の会長就任がなければ、現在のよう全国規模の活発な研究活動とは違ったものになっていたかもしれません。その意味において、村田先生によって、英語語法文法学会（の全国展開）の礎が築かれたといえるでしょう。村田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

悲しい、暗いニュースばかりが続きましたが、被災地の日も早い復興を願いつつ、（まだ予断を許しません）8月の英語語法文法セミナー、10月の年次大会が昨年と同じように開催できるよう事務局の仕事を行なって参りたいと思っております。

（吉良文孝）